

第1課 アイデンティティーの危機

【暗唱聖句】

「論じ合おうではないか、と主は言われる。たとえ、お前たちの罪が緋のようでも雪のように白くなることができる。たとえ、紅のようであっても羊の毛のようになることができる」。イザヤ 1:18

【はじめに】

イザヤは「神は救う」という意味の名。ウジヤ王 (BC783年頃～BC742年頃) からヒゼキヤ王 (BC716～BC687年) の頃活動した。イザヤ書は 66章からなり、以下の3つに分けることができる。第一(1～39章)、バビロン捕囚前にエルサレムでの40年間に語った預言。第二(40～55章)、バビロン捕囚地での預言。第三(56～66章)、バビロン捕囚からの帰還後の預言。150年も先に起こるバビロン捕囚や帰還後のことをあまりにも正確に預言している。たとえばペルシャのキュロス王の名前をだし、バビロンを征服する預言している。このことからイザヤではない人物が書いたのではないかという説もあるが、それぞれに「主の御口が語られた」(1:20/40:5/58:14)とあり、イザヤが主に導かれて書いたことを示唆している。メシアについてもイザヤが最も詳しく預言している。

【日曜日・天よ聞け】

「天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる。」イザヤ 1:2

イザヤ書 1章 2節以降では神の法廷が開かれる。原告は神であり、被告人は神の子ら(神の民イスラエル)、そして証人は「天と地」。「天よ聞け、地よ耳を傾けよ」とは、申命記 30:19に「私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる」とあるように、神は天と地が証人であると表現することで、天も地もすべてのものが民が神に背いたことを知っている、見ているということを強調している。

「わたしは子らを育てて大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。牛は飼い主を知り、ろばは主人の飼い葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず、わたしの民は見分けない」イザヤ 1:2, 3

神の訴えは神の子らが背いたということ。牛やろばでさえ飼い主のことを知っているのに、イスラエルの民はご自分を知らないとその嘆きの深さが強調されている。

【月曜日・腐敗した儀式主義】

「もし、万軍の主がわたしたちのためにわずかでも生存者を残されなかったなら、わたしたちはソドムのようになり、ゴモラに似たものとなっていたであろう。ソドムの支配者らよ、主の言葉を聞け。ゴモラの民よ、わたしたちの神の教えに耳を傾けよ」1:9, 10

ソドム・ゴモラの指導者と民よ聞けと、神はイスラエルの民をソドムとゴモラと同じようにみなしている。そしてイスラエルがソドムとゴモラと変わらぬほど腐敗しており、神が憐みをかけなければ同じように滅びていてもおかしくなかったことが告げられている。

「お前たちのささげる多くのいけにえがわたしにとって何になるのか、と主は言われる。雄羊や肥えた獣の脂肪の献げ物にわたしは飽いた。雄牛、小羊、雄山羊の血をわたしは喜ばない」イザヤ 1:11

神から遠く心が離れ、犠牲制度は形骸化・儀式化していた。そのような状況でどれほどいけにえが捧げられたとしても、何の意味もなく、主は喜ばない。現代における礼拝も形骸化してしまうならこれと同じである。

「お前たちが手を広げて祈っても、わたしは目を覆う。どれほど祈りを繰り返しても、決して聞かない。お前たちの血にまみれた手を」イザヤ 1:15

神は血にまみれた手(暴力や虐待によって汚れた手)で祈っても、その祈りを聞かないと言われる。もし祈りが聞かれないことがあるとすれば、それはその手が罪で汚れているとき。「洗って、清くせよ。悪い行いをわたしの目の前から取り除け。悪を行うことをやめ、善を行うことを学び…」(イザヤ 1:16, 17)と続くように、心から罪を悔い改めて主の御元に近づくなら主は受け入れて下さるが、汚れたままであるならどんな礼拝も祈りも神

は目を覆われるだろう。

【火曜日・赦しについての議論】

「論じ合おうではないか、と主は言われる。たとえ、お前たちの罪が緋のようでも雪のように白くなることができる。たとえ、紅のようであっても羊の毛のようになることができる」イザヤ 1:18

「緋」と訳された言葉は二度染めした真っ赤な色を現わしている。罪を緋あるいは紅のような真っ赤な色として描いているのは、15 節の血にまみれた手から来ているわけだが、神はどれほど罪が真っ赤に染まっても、雪や羊の毛のように真っ白にすることができる。完全に罪を赦すことができる方である。まだ希望は残されている。だから話し合おうではないかと言われる。神は民を悔い改めに満ちこうとしている。イザヤ 44:22, 23 には次のように書かれている。

「わたしはあなたの背きを雲のように、罪を霧のように吹き払った。わたしに立ち帰れ、わたしはあなたを贖った。天よ、喜び歌え、主のなさったことを。地の底よ、喜びの叫びをあげよ」44:22、23

主に「立ち帰る」ことが強調されている。「立ち帰り」を可能とするお膳立てはすでにできている。神は「あなたの背きを雲のように、罪を霧のように吹き払った」。吹き払ったという動詞は預言的完了形。そして「あなたを贖った」こと。つまり、罪の赦しのための代価が支払われた。だから「わたしに帰っておいで」と命じているのである。新約の教えと同じである。神に立ち帰ることができるのは、すでに罪が赦されているから。

*イザヤ書 1 章だけでも、罪を表わす言葉が 3 つ使い分けられている。

- (1) 動詞「パーシャ」(1:2、28) …神との関係が破れた状態を表わし、「背信」「そむき」と訳されている。
- (2) 動詞「ハーター」(4、18、28) …的をはずすという意味。罪と訳されている。神から離れた人間の状態。
- (3) 名詞「アーヴォーン」(4) …神から離れた人の心と行為の「ゆがみ」を意味しており、咎と訳されている。

【水曜日・食うか食われるか】

「お前たちが進んで従うなら大地の実りを食べることができる。かたくなに背くなら、剣の餌食になる。主の口がこう宣言される。」イザヤ 1:19、20

罪を悔い改めるのなら、その罪は赦されて、大地の実りを食べることができるが、かたくなに背くなら剣の餌食となる。条件付きの祝福と呪いが描かれている。

「わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。」申命記 30:19

私たちの前には神の祝福と呪いの両方が置かれている。私たちが自分でどちらかを選び取るのである。中立はない。もちろん神は祝福を選び取ってほしいと願っておられる。

「あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主に付き従いなさい」30:19、20

祝福（命）を選びたいのなら、その条件は主を愛し、御声に聞き、主に従うことである。神の恵みは圧倒的である。それを自ら放棄するのは愚かなことである。

【木曜日・不吉な愛の歌】

イザヤ 5:1~6 では、イスラエルをブドウ畑にたとえられており、神は「良いぶどうが実るのを待ったのに、実ったのは酸っぱい（腐った）ぶどうであった」（5:2）。神は、「ぶどう畑のためになすべきことで、（神が）何かしなかったことがまだあるというのか」（5:4）と言われる。期待をかけて育てたのに、その無念さ、悲しさがにじみ出ている。それゆえ主はブドウ園を見捨て（5:6）られる。主の手が取り除かれた後のブドウ園は、無残にも荒れ果てていく。人生において辛いことが起こったとしても、誰も主を批判することなどできないのだ。